



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

幼児をもつ父親のワークライフバランスとその関連要因

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保,恭子, 倉持,清美, 岸田,泰子, 及川,裕子, 田村,毅 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/132636

幼児をもつ父親のワークライフバランスとその関連要因

久保 恭子*・倉持 清美**・岸田 泰子***
及川 裕子****・田村 毅*****

生活科学分野

(2012年9月13日受理)

I. はじめに

育児不安やストレス、子ども虐待など、子育てに関する様々な研究は保育学、教育学、看護学、家政学、社会学など多くの分野で幅広く行われている。これらの研究をみると、研究の対象者は母親であることが多く、母親の育児上の困難感や支援方法、女性の就労と育児との両立、父親の育児参加と母親のメンタルヘルスについてなどがある。

それでも、ここ最近では父親を対象にした研究が増えつつある。例えば、育児期の父親に関する研究をみると、乳児の泣きが及ぼす心理生理的影響の父親と母親の差¹⁾、育児負担や不安について²⁾、社会の変化に伴う男性の危機について³⁾、子ども虐待と夫婦関係について⁴⁾、子育ての意識や育児行動について^{5, 6, 7, 8)}、育児ストレスについて⁹⁾、父親の育児幸福感について¹⁰⁾などがある。これらの研究から、共働き世帯の父親は育児と仕事との両立に葛藤を持っていること、父親と子どもとの関係性は子どもや父親自身の成長に影響すること、父親は育児を母親の仕事と思いながら、父親が育児をせざるを得ない状況の中で、育児ストレスが発生することなどが報告されている。これらの報告の多くは、共働きの父親の仕事と育児の両立に関するものであり、母親が専業主婦である父親の仕事と育児の両立に関する報告は見当たらない。

ワークライフバランスの視点から、母親の育児と就

労の両立に関する支援が盛んに行われているが、常にフルタイムで働いてきた父親のワークライフバランスに関する報告は少ない。「イクメン」という言葉があるように近年では、母親の就労の有無を問わず、父親も積極的に育児に参加している。本研究の目的は、母親が専業主婦であり、幼児を持つ父親のワークライフバランスとその関連要因を明らかにすることである。

II. 対象と方法

1. 対象者：東京および近郊に住む父親178名で、第1子が3歳前後であり、なおかつ母親（パートナー）が専業主婦であるケースを分析の対象とした。
2. 研究方法：質問紙調査。本研究は妊娠期から子育て期へと縦断的に研究データを集めている。まず、妊婦とそのパートナーに第1次調査質問紙を配布（6289組）、この中から、今後の研究に協力の意思を示した1390組に出産後4ヶ月に第2次調査質問紙、1年後に第3次調査質問紙、2年後に第4次調査質問紙、3年後に第5次調査用紙を配布した。調査期間は2001年から2005年である。質問紙の内容は里帰りの有無、夫婦関係、子どもへの感情、育児分担、現在の心境などの項目で構成した。これらの質問項目は先行研究を参考に独自に作成し、妥当性、信頼性の検討は、小児看護学、母性看護学、家族看護学、臨床心理学、発達心理学、児童精神医学の研究者らからスー

* 横浜創英大学
** 東京学芸大学
*** 杏林大学
**** 園田学園女子大学
***** 田村毅研究所

パーバイズを受けた。質問紙のリッカードは夫婦関係を尋ねた「妻との関係は安定している」「妻との関係に満足している」は「非常にあてはまる (10点)」から「まったくあてはまらない (1点)」と10段階尺度で回答を得た。それ以外の質問項目は「とてもそう思う (4点)」から「そう思わない (1点)」の4段階尺度で回答を得た。得点が高いほど、とてもそう思うと回答している。分析方法は統計パッケージSPSS20Jを用いて、スピアマンの相関分析を用いて検討した。

倫理的配慮：個人情報については厳重に管理し、データ処理にあたってはコード化し文書上の匿名性を守秘すること、協力の有無でなんら不利益をこうむらないこと、研究終了後データは速やかに処分することを口頭と文書で説明をし、了解を得た。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の概要

出産時に大きなトラブルがあったケースや、父親になった年齢が18歳以下をはずした178名を対象とした。父親の年齢は児の出生時、最小26歳、最高55歳で平均36.2歳 (±4.08) であった。子どもの年齢は2歳11か月58名 (32%)、3歳115名 (66.5%)、4歳1か月3名1.2%) であった。性別は80名 (45%) が男子、95名 (53.4%) が女子であった。日中の主な子どもの世話をする人は母親132名 (75%)、父親1名 (0.6%)、幼稚園 (保育園) が34名 (20%) であった。祖父母とともに世話をする8名 (4%) であった。

2. 仕事・家事・余暇の割合と仕事と育児の両立について

あなたの毎日の生活を仕事、家事・育児、余暇と分けるとおよそ何割の配分になるか (合計100%になるように設定する) という質問に、「仕事の割合」は90%が10名 (5.6%)、80%以上が44名 (25%)、70%が53名 (29.8%)、60%が35名 (19.7%) であった。家事の割合は50%以上が12名 (6.8%)、30から40%が45名 (25.3%) であった。余暇の割合は30%以上と回答した者はおらず、20%が32名 (17.4%)、10%以下が132名 (74%) であった。仕事と育児の両立にストレスを感じていますかという質問には、まったく感じない8名 (4.5%)、あまり感じない62名 (35.8%)、時々感じる81名 (45.5%)、頻繁に感じる18名 (10%) であった。

3. 子どもの発達の様子について (図1)

父親が母親に相談せずに、そう思う、ややそう思うと回答した人数と%をまとめた。

ひとりで排尿ができる156名 (87.6%)、生活リズムが整っている129名 (72%)、毎日便が出る97名 (54.5%)、気が散りやすい88名 (49%)、食事をよく食べる97名 (64.6%)、なかなか泣き止まない64名 (36%)、新しい場所を怖がる30名 (16.8%)、簡単な文章をいう101名 (56%)、いくつ、お名前はに回答できる140名 (80%) であった。

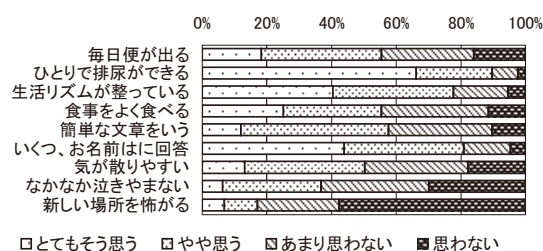


図1 子どもの発達や気質の様子

4. 子どもに対する感情・接し方 (図2)

父親がそう思う、ややそう思うと回答した人数と%をまとめた。子どもをいじらしく感じる172名 (98%)、子どもを抱きしめたい172名 (99%)、子どもにやさしく話しかけている160名 (92%)、子どもにかつとなるときがある93名 (53.8%)、子どもをコントロールしている54名 (31%) であった。子どもに対して気なることは (複数回答あり)、運動能力について103名 (92.8%)、言葉について99名 (89.2%)、他の子どもとの接し方67名 (60%) であった。

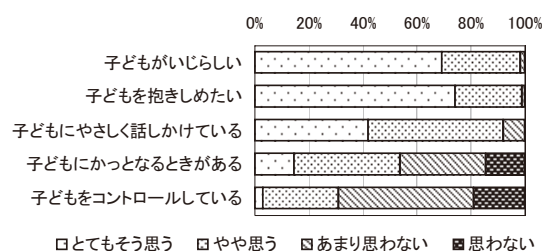


図2 子どもに対する感情・接し方

5. 育児の方法について (図3)

父親がそう思う、ややそう思うと回答した人数と%をまとめた。自分の育児に自信がない26名 (15%)、子どもへの接し方がわからない22名 (12.9%)、他の子どもと比べてしまう40名 (23%)、子どもが泣いている理由がわからず心配になる38名 (21.4%)、子ど

もが言うことを聞かずいららする109名(61.6%)であった。

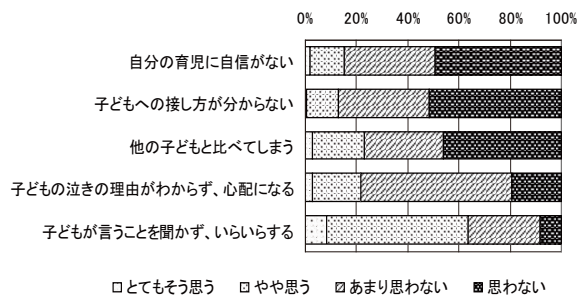


図3 育児の方法について

6. 父親の心境について (図4)

父親がそう思う、ややそう思うと回答した人数と%をまとめた。我慢ばかりしていると思う24名(14.1%)、自由な時間が欲しい138名(77.5%)、友人と交流したい99名(65.6%)、家事の分担を減らしたい29名(16.3%)、だれかに愚痴を言いたくなる51名(28.8%)、子育ては大変だと思う164名(92.7%)、子どもができたことで行動が制約される139名(78.6%)、子どもが順調に育っているか不安だ50名(28.2%)、毎日が面白くない23名(13%)、一人ぼっちでさみしい5名(2.9%)、子どもの成長とともに育児が楽しくなった154名(87.4%)であった。

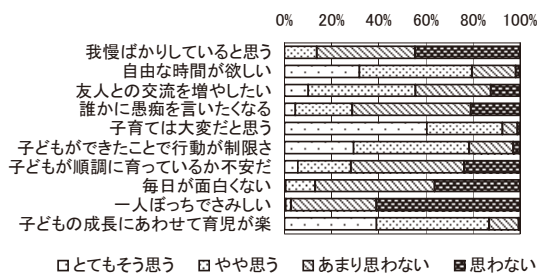


図4 父親の心境について

7. 生活の変化について (図5)

父親がそう思う、ややそう思うと回答した人数と%をまとめた。夫婦で話し合うことが増えた101名(43.5%)、子どものおかげで自分も成長した153名(85.9%)、子どもが自分の生活に充実をもたらした170名(95.5%)、妻に対して腹が立つことが多くなった54名(30.3%)、仕事への意欲が高まった108名(60.7%)があった。

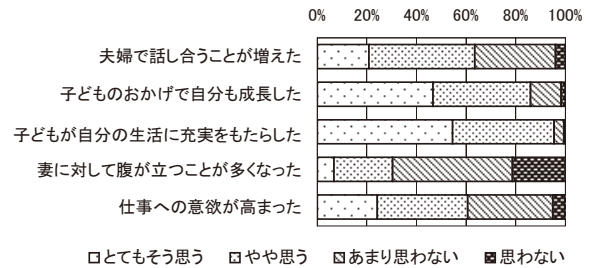


図5 父親の生活の変化について

8. 夫婦関係について (図6)

幸せな結婚生活を送っているでは、非常にあてはまる、かなりあてはまる132名(75%)、妻との関係は安定している120名(68.1%)、夫婦のきずなは強い125名(71%)、妻との関係に満足している121名(68.7%)、妻とのチームワークはよくとれている106名(60.3%)であった。

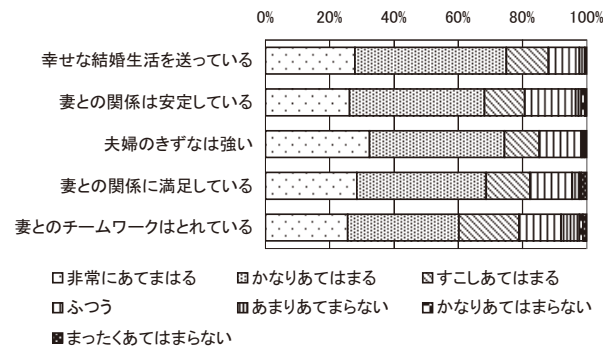


図6 夫婦関係について

9. 子育てや家事への参加度 (図7)

子育てへのかかわり方では、子どもの入浴をよくする、時々するが151名(86.8%)、食事の世話128名(73.5%)、しつけ144名(82.7%)、子どもと遊ぶ163名(94.2%)、寝かしつけ93名(54.4%)であった。家事では食事のしたく50名(28.7%)、食器洗い91名(52.3%)、部屋の掃除75名(42.8%)、お風呂掃除106名(60.6%)であった。

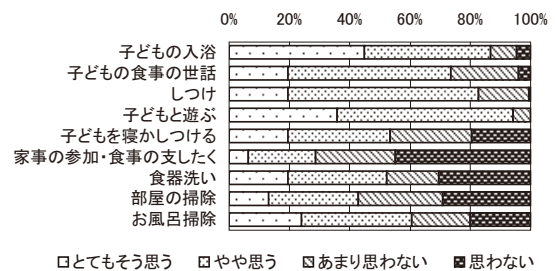


図7 子育て・家事の参加度

10. 妻（パートナー）や自分自身に対する満足度（図8）

妻からの思いやりでは満足、やや満足しているが153名（87.4 %）、妻との家事分担では159名（90.9 %）、妻とのコミュニケーションでは157名（89.8 %）であった。自分自身の満足度については仕事について114名（65.2 %）、友人関係133名（76 %）、余暇について96名（54.8 %）、トータルで考えた自分の生活157名（89.7 %）であった。

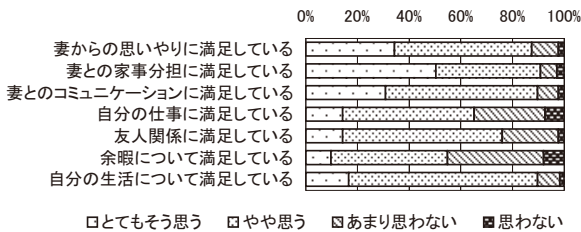


図8 パートナーや自分自身に対する満足度

11. 仕事と育児の両立に関するストレスと各項目との相関について

仕事と育児の両立のストレスと仕事の割合、子どもの発達、子どもへの感情、育児・家事への参加度、父親としての心情、生活の変化、夫婦関係、自分の生活の満足度の各項目等とスピアマンの相関分析を用いて分析した。結果、子どもができたことで自分の行動が制限される（ $r = .390$ $p < 0.00$ ）、友人との交流が減った（ $r = .374$ $p < 0.00$ ）、子どもが言うことを聞かずイライラする（ $r = .453$ $p < 0.01$ ）と相関が得られた。また、実際の育児行動が多い、少ない、また家事支援が多い、少ないでは仕事と育児ストレスとは相関がみられなかった。

Ⅳ. 考察

本調査の結果をまとめると、父親のワークライフバランスは仕事中心であった。仕事量や育児・家事の分担、関わりの多少に関わらず、自分自身の生活の制限や友人との交流の減少が仕事と育児の両立にストレスを感じていた。つまり、今の生活の中で、自分自身の時間の確保ができないこと、子どもが父親の指示命令に従えないことも仕事と育児の両立に関連していた。

矢澤の研究¹¹⁾によると、共働きの父親は仕事と家庭の両立、家事の負担感でストレスを感じており、本調査の結果から、専業主婦を持つ父親も共働きの父親と同じ悩みを持っていることが明らかになった。日本の文化の中で、父親は仕事をして家庭の経済を支える存在であり、子育ては伝統的に母親の仕事という性役

割分業はいまだ残っていると報告している¹²⁾。父親役割の変遷をみると、以前は父親＝稼ぎ手であったのに対し、近年では新しい父親像として稼ぎ手であると同時に、子どもの世話をすることが求められていると報告されており¹³⁾、今の日本の子育て事情は、子育て文化の移行期である。このような移行時期は母親、父親ともお互いの要求や価値観がずれ、夫婦の危機を感じやすい。夫婦共働きという状況下であれば、家事も育児も夫婦ともにという考えを父親は持ちやすいと推測するが、母親が専業主婦であるケースでは、父親は稼ぎ手、母親は家事・育児の担い手という役割分業の考えを夫婦ともに持っている場合もある。それぞれの家庭の方法はあるにせよ、父親が子どもと接すること、育児を楽しむことは父性の発達とともに、子どもの成長・発達にも良い影響を与える。このことから、支援者は今度、父親の育児をよりサポートしていく必要がある。また、本調査から、父親は子どもが父親の指示に従わないことにストレスを感じていた。子どもが2歳、3歳になってくると、子どもの動きも活発になり、言葉でもコミュニケーションも盛んになってくる。しかし、子どもが親の言動をどこまで理解できているのか未知であり、特に、子どもが夢中になって遊んでいるケースでは父親の指示が伝わらないことも多い。今後の課題として、父親に子どもの成長・発達段階と具体的な子どもとの接し方を指導するような場面を設定していく必要がある。

ウィークデイは多忙な仕事中心の生活、週末は子どもの世話・家事に追われる有様では自分の時間がない、自分の自由な時間がほしいと思うのは父親にとっても、母親にとっても当然のことである。核家族化が進み、身近に気軽に子どもを預ける人的資源を確保することが難しい時代である。また、子育て期の家族は経済的に余裕がなく、家事支援等を業者に依頼することも難しい。今後、経済的な負担が少なく、地域にある子育て支援センターでの預かり業務の拡大や土日祭日の営業などが求められる。合わせて、当然のことながら、企業等が父親の育児支援に向けてより一層の支援が必須である。さらに、子どもがいない生活と子どもを持ってからの生活は大きく変化をするため、父親自身が自分のワークライフバランスをどう持つか、再考できるような機会を持つことも必要である。また、支援者は仕事と育児の両立ではなく、仕事と育児、父親の余暇の時間の3本柱の視点をもちながら、支援方法を提供していくことが求められる。

V. 結論

専業主婦を持つ父親の約半数が、仕事と育児の両立にストレスを感じていた。このストレスには、仕事量や育児・家事の分担・子供との関わりの多少とは関連がなく、自分自身の生活の制限や友人との交流の減少が関連していた。これは、就労している母親を持つ父親のそれとほぼ同様の結果であった。また、子どもが父親の指示命令に従わないことも仕事と育児の両立に関連していた。

子育て期の父親へ支援をする際には、仕事と育児、父親の余暇の時間を確保するという3本柱の視点をもつことが望まれる。また、地域における子育て支援センター等でも父親が自由な時間を確保できるような支援とともに、子どもの発達段階と子どもへの接し方の理解ができるような支援の充実が求められる。

子育てに関する報告書によると、40%近くは専業主婦世帯である¹⁴⁾。専業主婦の方が共働きの母親よりも育児ストレスや育児不安が高いことが報告されており、今後は専業主婦とそのパートナーの双方のワークライフバランスも検討すべき問題である。

謝辞：本研究にご協力をいただいた方に感謝いたします。この研究は文部科学省科学研究費基盤研究（B）ジェンダー・センシティブな子育て家族支援グループ（課題番号20300233）代表、田村毅の助成を受けて行った研究の一部である。

参考文献

- 1) 高橋有里 桐田隆博：乳児の泣き声が父親・母親に及ぼす心理生理的影響，電子情報通信学会技術研究報告 HCS ヒューマンコミュニケーション基礎110（383），7-12. 2011.
- 2) 山下久美 庄司順一 首藤敏元：乳幼児を持つ母親の持つ育児負担感とその支援について（2）幼稚園における育児支援活動を考える，埼玉大学紀要教育科学53（2），33-50. 2004
- 3) 多賀 太：男性のエンパワメント？ 社会経済的变化と男性の「危機」，国立女性教育会館研究紀要，935-50. 2005-2008
- 4) 三上真千恵：幼児に対する虐待相当行為についての研究：世代間伝達現象と夫婦関係の視点から，心理相談年報5. 31-37. 2010
- 5) 田中結花子：父親の子育て意識と子育て支援 父親に対する子育て意識・育児行動の実態調査からの一考察 乳幼児の父親を対象に，金城学院大学大学院人間生活学研究科論集（9），33-41. 2009
- 6) 川上あずさ：父親の育児に対する役割意識に関する要因とその支援方略，小児保健研究67（3），496-737. 2008
- 7) 森下 葉子：幼児期の子どもを持つ父親の育児関与に関する研究の現状と課題，学校教育学研究論集15，15-28. 2007
- 8) 田辺 昌吾：乳幼児の父親の育児・家事行動が「父親」になった実感に及ぼす影響 妻の就業の有無に関する比較，家族関係学（26），73-86. 2007
- 9) 宮本政子：乳幼児を養育する母親および父親の育児支援に研究 育児ストレス構造の特徴と対処行動との関連，小児保健研究67（5），729-737. 2008
- 10) 清水嘉子：父親の育児幸福感：育児に対する信念との関係，母性衛生48（4），559-567. 2008
- 11) 矢澤澄子 国広陽子 天童睦子：「若い父親『父アイデンティティ』」「都市環境と子育て」，頸草書房，77-96. 2003
- 12) 白井雅美，渡部節子：父性性に関する研究—既婚男性の性役割感の特徴と父性性に影響を及ぼす父子関係との関連について—，母性衛生42（2），360-367
- 13) 大和礼子 斧出節子 木脇奈智子：男の育児・女の育児—家族社会学からのアプローチ，昭和堂，165. 2008.
- 14) 子どものいる世帯の生活状況および保護者の就業に関する調査 <http://www.jil.go.jp/institute/research/2012/095.htm>

幼児をもつ父親のワークライフバランスとその関連要因

Work-life balance of fathers having infants and factors related to their work-life balance

久保 恭子*・倉持 清美**・岸田 泰子***
及川 裕子****・田村 毅*****

Kyoko KUBO, Kiyomi KURAMOCHI, Yasuko KISHIDA
Yuko OIKAWA and Takeshi TAMURA

生活科学分野

Abstract

Purpose: To clarify how fathers try to cope with both work and raising their infants, consider the factors related to their challenge, and find the way to support those fathers.

Method: A questionnaire survey was conducted by asking 175 men having wife (full-time mother) and infant(s).

Results: About half the subjects (fathers) were found to be under stress resulting from their challenge to cope with work and raising children. Fathers' stress was neither related to the amount of work nor the extent to which they were assigned to the housework and the care of children, but related to restrictions on their own life and reduction of their chances to have time with their own friends. In addition, the fact that it is difficult for fathers to control their children and make them follow fathers' instructions also negatively affected fathers' stress.

Consideration: The results of this survey demonstrated that fathers have the same stress whether their wives are full-time mothers or working mothers. The way of thinking about bringing up children has been changing in Japan. More specifically, mother used to primarily take care of children based on the traditional gender role theory, but it has been currently considered that father and mother should share the functions of childcare. In such a period of transition, a divergence of values and a difference of demand may occur between father and mother to incur the risk of their relationship. The supporters are therefore required to help father's challenge to cope with work and childcare while preparing a spare time for father and keeping father's work-life balance in mind. In addition, it is necessary to give father some opportunities to learn how children grow up through the development stages and how to approach children according to the stages.

Key words: Father, full-time mother, period of transition through which the way of thinking about childcare is changing, infant, work-life balance

* Yokohama Soei University

** Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

*** Kyorin University

**** Sonoda Women's University

***** Tamura Takeshi Laboratory

要旨: 目的: 幼児を持つ父親のワークライフバランスとその関連因子を明らかにすることである。研究方法: パートナーが専業主婦であり、乳児をもつ父親175名を対象に質問紙調査を行った。結果: 対象者の約半数が、仕事と育児の両立にストレスを感じていた。このストレスには、仕事量や育児・家事の分担・関わりの多少とは関連がなく、自分自身の生活の制限や友人との交流の減少が関連していた。また、子どもが父親の指示命令に従えないことも仕事と育児の両立に関連していた。考察: 今の日本の子育て事情は、ジェンダーロールに基づいた子育ての方法から、子育ては夫婦そろって行うものという考えに移行しつつある移行期である。このような移行時期は母親、父親ともお互いの要求や価値観がずれ、夫婦の危機を感じやすい。今後、支援者は父親の仕事と育児の両立にプラスして、父親の余暇の時間を提供できるよう、また、父親のワークライフバランスも視野に入れた支援を提供していくことが求められる。さらに、父親に子どもの成長・発達段階と具体的な子どもとの接し方を指導するような場面を設定していく必要がある。

キーワード: 父親, 専業主婦, 子育て文化の移行期, 幼児, ワークライフバランス